

# 百済の里 南郷村を訪ねて

高司 良恵

(会員・佐伯市宇山区)

七月十日 快晴 それぞれ車に分乗した「宇山長音頭保存の会員、柏江地区有志」総勢八十餘名は、一路国道十号線を南下「日向市」から右折、宮崎県南郷村へと向かった。

整備された道路、稲田に注ぐ夏日がまぶしく風に揺れては大きく波打ち豊作を予感する。

車窓より九州山系の稜線を目で追いながら、まだまだ台風のため跡風倒木が、痛々しく感じられる。山紫水明の村々をいくつか通り過ぎ三時間餘、山ふところに抱かれた「百済の里」ともいわれる南郷村に到着した。

小高い丘に新装の庁舎村役場が、韓国風の雰囲気を漂わせそれに併設されたすばらしい施設「多目的研修センター」へと案内される。玄関には、歓迎大分県佐伯市宇山・柏江公民館御一同様の立看板に、あたたかい安らぎの気持が伝わってくる。

今日のメインは、昨年十一月、本年四月「お為半蔵比翼恋」の返礼交流会である。

二百年前から、南郷村に伝承されている盆踊り「いだごころ踊り」と堅田踊りお為半蔵の「長音頭」に共通点があることからそのルーツを求めて始まった、交流の盆踊りが回を重ねて三度目になる。

又、当佐伯史談会の方々が以前南郷村を訪れていると聞いていたので、尚更のこと執着心が湧いてくる。

交流会は、広い会場に心地よい冷房の入った最高のもてなしの中、午前十時からセレモニー、田原正人村長さんからは、「いだごころ踊り」「たかなべ」。宇山長音頭保存の会から「与勘兵衛」「お夏清十郎」「長音頭」柏江地区からは、「茶屋のれん」「大文字」の盆踊りが次々に披露された。

交流会のフィナーレは、「いだごころ踊り」の音頭のリズムにのって、全員総参加、総踊りの競演は地域を超越し、ひとつの大きな輪となって、最高の盛り上がりであった。

総踊りの餘韻のさめやらぬ中、昼食。婦人会の方々が

徹夜で料理されたという山の幸を御馳走になり、あちこちのテーブルで話の花が咲き続け、再会を約しつつ万才の声も高らかに交流会を閉じた。

午後からは、南郷村文化協会会長土田氏の案内で、百濟伝説古代の謎ともいわれる神門<sup>みかど</sup>神社を始め、「百濟の館」建築中の「西の正倉院」を訪ねた。

## 神門<sup>みかど</sup>神社



約千三百年前に溯るが、この神門の中心部に樹令五百年以上と思われる小高い丘の森があり、この森の中に「古代史の謎」と呼ばれる歴史を秘めた神門<sup>みかど</sup>神社がある。

社境内には、落原台地から南にはり出した古墳のようにも見える敷地。古色蒼然たる社殿。朝鮮半島の古代国家「百濟」が「唐」と「新羅」の連合軍によって、西暦六百六十年滅亡されたこ

とは、世界史上の定説であるが、この「百濟」の王族が、移り住んだ所としての伝説があり、この王族が神門<sup>みかど</sup>神社の祭神となっている。

## 百濟の館

日韓交流のシンボルとして、建てられたもので、韓国ノ百濟古都扶餘ノの王宮跡地内にある「客舎」をモデルに複製された。屋根瓦を韓国から取り寄せ、垂木や梁を埋め尽くす極彩色の丹青（タンチョン）は、本場韓国の職人が腕を振るった。内部は資料館や土産品店になっており、村の迎賓館としての役割をもっている。神門神社の近くにある。

## 西の正倉院

神門神社に伝えられる、百濟王族の遺品である貴重な文化財を保管するために、「奈良正倉院」と同じ「西の正倉院」が、今、南郷村に建築中であり、平成八年三月を完成予定に進められている。

造管材の栓は、全国を調査し木曽の天然栓を使用して  
いたのは、なんとといっても驚きの目を見張った。

### 神門神社の宝物

宝物を大別すると、銅鏡33面、馬鈴ばれい、馬鐸ばたく（馬具の一  
つであり馬の頸ひの胸に近い所につける。騎馬民族が好ん  
で使用し高句麗や新羅に多く出土し、日本各地でも出土  
するが数は少なく貴重なものである。）須恵器（陶器に  
近い硬質の土器、技術と職人は朝鮮半島から導入され、  
その人々は陶部たうぶと呼ばれた。）鉄剣（直刀）、銅製の像



百濟傳説の残る石

板絵観音、板葺の神殿などがある。

古代史の謎とロマン百濟の里南郷村の「いだごろ踊り」  
と堅田踊りの「長音頭」が結んだ交流の縁は、感慨一入  
胸に迫るものがある。又、この機会に神門神社の国宝級  
の宝物数々を、じかに拝見させていただき興味深く勉強  
する事ができた。

山深いこの里に、百濟王国の国際色も豊かに村人挙げ  
てその伝統を守り育てる息吹を身近に感じ充実感に浸り  
つつ南郷村をあとにした。

註◎ 文献を一部参考にさせていただいた。

### 付記

盆踊り「いだごろ」 お為免半造

国は豊州 海部の郡

佐伯領とや 片田のおやま

おやまなれども 小村で名所

名所なりこそ お医者もござる

ござるお医者は げんりよさんと  
さじもよく効く お医者もはやる  
その息子に 半造といふて

年は二十一 男のさかり

じたい半造は しゃれ者なれば

襟は着重ね 小褌を揃え

帯はまうらい きりりと巻いて

三重にまわして きちやて止める

羅紗の羽織に 梅ばちの紋

二尺一寸 おともに差して

足袋はうんさい やつ緒の雪駄

町も在所も 辻うらまでも

しゃならくと 医者して廻る

死ぬる病気も はや立ち返る

はやるお医者 は これ半造さん

半造の思ひは この川下に

しおの入る日を見る川下の

あたり上りの 閑所のこむら

閑所小村に 竜聚院と

竜聚院とわ 山伏のこと



其れに娘が きよだいござる

妹娘に お為女と 言ふて

年は十八 花ならつぼみ

じたいおためは しゃれ者なれば

立てば芍薬 坐れば牡丹

歩く姿は 夏百合の花

いくら名高き 絵書上手も

お為めの姿は よう書きやすまい

其れに半造が 心をかける

常に逢おとて 逢う事ならぬ

来る正月 二十八日の

竜宮さんなる 初御縁日

村の若い衆 同志朋輩が

われもおれもと 参詣なさる

お為め参ると 半造が聞いて

そこで半造が お参りなさる

なんごござこで お為めに出逢い

お為めどうかと 手に手をとれば

お為め驚き 顔打ち眺め

誰かどなたか 半造さんか



色の道なら お許しなされ

外の事なら いかよな事も

叶え上げます これ半造さん

早くしなされ 心中の仕度

早く死なねば 夜が明けます

人は知らねど 鳥が知りて

夜明の鳥が さえづります

心得たりと 上衣はだぬぎ

白装束で後はちまき こじゃんとしめて

花のようなる お為めの身体

どこも刀の当どこもない

お為め引寄せ よう一刀

死んだお為めに 腰うちかけて

一つの火縄を 八つに切つて

八つのこぐちに さと火をつけて

どんと打出す 此の世のいとま。

平成四年 南郷村「中村寿一」氏が、記された口説の前半（お医者半造のこと お為めとの出会い）  
終末の心中の様を抜粋しました。前号57Pと比較して頂くと参考になると思います。

以下は木立地区に残る口説の中から、心中の道行き場面を抜すいしたものです。

サヅ暗さも暗し後ろ田の  
此処を通れば思ひ出す  
過し五月の田植には

村の娘子打ち連れて

あかね茜のたすきの華やかに

すげ管の小笠の一揃い

くけし真紅の紐締めて

緑の早苗抱えし帯

誰を思ひにやせ腰の

ぬれて植えたる稲さえも

秋は実のりの穂をかざし

末は世に出てまゝとなる

同じ月日の下に住む

妾とお前は何故に

えだち発育もやらぬしいら穂の

実りもせいで果つるか

云へば半蔵が扱て申すには

云ふて還らぬ皆仇言よ

何を悔みてなく時鳥

ないて飛び行く声きけやおため

しして死出の山路や冥土の旅の

道を教へて先づさきに立つ

